
残念すぎる最後を迎えた男の物語

ムタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残念すぎる最後を迎えた男の物語

【NZコード】

N8811M

【作者名】

ムタ

【あらすじ】

これは高一の夏に残念すぎる最期を迎えたオタクの話。

第0話 死因は車じゃない（前書き）

駄文で処女作ですが精一杯頑張りますので、よろしくお願いします。

第0話 死因は車じゃない

高校一年生の夏、補修が終わって家に帰るひつとしていた。

欲しいものや用事もなく、寄り道をする必要がなかったから家に一直線で帰る予定だった。

だが、帰り道の途中にある横断歩道の前まで来てその光景が目に入った。

赤信号。

歩くおばあちゃん。
横から来る車。

たぶん、考えるより先に体が動いたと思う。

その場から思いつきリダッシュ。横断歩道のど真ん中にいたおばあちゃんを突き飛ばした後すぐに、右横から衝撃が走った。初めての交通事故。僕の初体験はアナタでしたか。

そのまま何メートルか飛ばされると、そこは公園だった。
「あー・・・俺死ぬのな・・・」的な事を考えていると、三輪車に乗った小さな男の子が現れた。

どうしたの?と声をかけようとしたが、口からばよざヒューザヒューとしか出ず、ついには血を吐き出してしまった。

そんな俺を見てどう思ったのか、男の子はそのまま三輪車で俺の胸を轢いて通り越した。Sだコイツ。

その瞬間、俺の左胸の中の“何か”が止まつた気がした。

だんだん視界が狭くなってきた。耳も遠くなってきた。感覚もなくなってきた。ヤバい。これはヤバい。

このままじゃ死んでも死にきれない。できることなら、死ぬ前に一度

「迷い猫オーバーラン最終巻を読みたかった・・・」

あ、今声出た。

そして俺の意識は途絶えた。

第1話 転生したからって神様に会える訳じゃない（前書き）

今回こいつを飛びます。

第1話 転生したからって神様に会える訳じゃない

結果から言つと、俺は新たに有馬 瑞希（男）として生まれ変わった。

いわゆる輪廻転生、というやつだ。

この名前を初めて聞いた時は、とあるPCゲームの主人公と、殺人料理を作る桃髪のヒロインを思い出した。

誕生日は転生前と同じ五月、生まれは鈴音町だ。

今思えば、鈴音の名を聞いた時に気が付けばよかつたと後悔している。

黒髪ロング。顔は・・・・女顔だ（しかも結構美人・・・）。

初めの頃は母のおふざけで女の子用の服を着させられているのだと思っていたのだが、小一になつても着させようとしていたので流石に分かつた。

その時、母は心底残念そうな顔で舌打ちした。それが親のする事か、母よ。

六歳の夏、父方の祖父の知人がやつてている施設に行つたった事がある。村・・・・なんとか学園だつたと思う。

そこで一人の女の子と出会つた。

女の子は学園内の公園でひとりブランコで遊んでいた。暇だつたからだと思う。俺は女の子に聞いた。

「一人で遊んでいるの？」

「・・・・うん」

「他の子と遊ばないの？」

「・・・・」

女の子は答えなかつた。だから俺は

「じゃあ僕と一緒に遊ぼうよ。」

と誘つた。我ながらクサいセリフだったと想つ。その時は「まあ、俺今子供だし」「いや」で済ましていた。

そしたら「え、いいの?」的な視線を向けてきたので元気よく頷くと女の子は立ち上がりて

「・・・じゃあ、あそぼ」

と言つた。

女の子は「・・・やのぞみ」と自己紹介してくれた。俺はのぞみちゃんなど呼ぶことにした。

ただ、俺が自己紹介をした後「みずき、ちゃん?」と勘違いされた時はかなりダメージを受けた。

のぞみはみずきに1000のダメージをあたえた!
!

辺りが暗くなるまでのぞみちゃんと一緒に遊んでいた。(もちろん誤解は解いた)

帰る事になった時、のぞみちゃんが

「また、あそんでくれる?」

と聞いてきたので、髪を結んでいた(両親から「髪は切るなー腰まで伸ばせ!」と言っていたので、その時はポニーテールにしていた)青いリボンを一つ渡して

「うん、こいよ」

と返事をした。その時に見せてくれた笑顔は今でも鮮明に覚えている。

その後十年間、俺はのぞみちゃんと一度も会えなかった。

だが次に会うまでの間、俺は忘れていた。

彼女が霧谷 希であることを。

中一の自然教室で、自分の隠れた才能を発見した。
声マネである。

いや、それはもうボイスチェンジと言えるモノであった。
何せ、髪をツインテールにし、伊達眼鏡を掛け、声を水城奈 にして登校したら、注目はされるわ、告白されるわ、ナンパされるわで大騒ぎ。だれも気付いてくれないのね・・・。

変装を解いて教室に入ると、クラス中が「ツインテ 眼鏡つ子美少女
で声が水城奈 の転校生」の噂で持ちきりだったくらいだ。
ちなみに、クラス全員にネタバレしたら

「なんだって？！」
「チクショウ！」
「一瞬でもカワイイと思った俺がバカだつた！」
「俺の初恋を返せ！」
「男のくせに！」
「女装男に負ける私達つて・・・」
「なんか納得いかない！」

等々、カオスな事になってしまい、一時間目ができなくなってしまった。先生、ゴメン。

その後、隣のクラスの安川という男子に「男の娘ボイスチェンジヤ

「 」という不名誉なあだ名を貰つた。〇〇〇

いきなり話が変わるが、高校入学一週間前に両親が亡くなつた。
死因は交通事故らしい。

なんでも轢かれそうになつた人を一人で助けようとしたらしい。俺の親らしい行動だと思う。

その時俺は事故つた相手を恨む訳でもなく、悲しむ訳でもなく、ただ「ああ、またか」という感想しか浮かばなかつた。
転生前も両親は交通事故で亡くなつてゐる。まあ転生後の両親みたいな事はしていないけど。

それより気になる事が一つ。

両親が助けた人なのだが、なんと俺が入学した梅ノ森学園の生徒だ
という。

学園に行つたらその人を探さなくては。

怒る為ではなく、両親の最後を聞くために。

さらに話が変わるが

プリンセスでラバーな展開が本当に起つた。

・・・俺の頭が狂つてる訳じゃない。本当にあつたんだ。そんなトンデモ話が。
まず、俺の両親が亡くなつてから起つた事を話をそう。
俺の身元を引き受けと言つ人が現れた。
もうお分かりだと思うが、会つた事のない父方の祖父、有馬 一心
だ。

梅ノ森財閥を数年前追い抜いた有馬財閥のトップらしい。

なんでも父は財閥を継ぐのと母との結婚の一択を迫られて、迷わず母を選んだらしい。スゲーな、父。

そして父が死んだ今、俺に白羽の矢が当たつたらしい。

とつあえず、高校卒業まで待つてもらひつ事にした。即決とか無理重すぎ。

その間、身辺警護と身の回りの世話とこいつ事で、一人メイドが付く事になった。

これまたもうお分かりだろ？

名を藤倉 優さんと言ひ。

・・・・・ マジで優さんが出てくるとは思わなかつた。

しかも梅ノ森学園に転校することになつた。ここまで忠実だともうツツコむ氣力も出ない。

ちなみに資金援助もしてもらえる事になつた。学費が無料タダとはいさすがに俺一人じゃ二人分の食事代を稼ぐ事はできません。ハイ。そんなこんながあつて、高校を一ヶ月も休んでしまつた。

* * * * *

そして今、俺と優さんは自分のクラスのドアの前にいる。同じ制服を着て。

そつ“同じ”制服を着て。

「似合つていますよ。瑞希さん

「俺、男よ？」

似合つてるとか言わんとくれ、優さん・・・。優さんには公私共に名前+さんづけで呼んでもらつてゐる。「瑞希様」とか有り得ない。

・・・最初はそう呼ぼうとしていたみたいだけ。

制服は、有馬御用達の仕立て屋が俺を女と勘違いしたらしく、男物は明後日にならないと届かないらしい。もう慣れたよ。

「二人とも、入つて来てください」

お、呼ばれた。さて行きますか。

「「はい」」

こつじて俺の高校生活は始まつた。

第1話 転生したからって神様に会える訳じゃない（後書き）

急展開すげて「ゴメンナサイ。

次回はあっち側から始まります。

第2話　自分の姿を気にしてなーからーいつなる（前書き）

いきなり長いです。

感想指摘誤字脱字など書き込んでくれると嬉しいです。

4／2編集しました。

鳴子の台詞が難しそう（汗）

第2話 自分の姿を気にしてないから」いつなる

Said 三人称

梅ノ森学園、1 Dクラス内にて。

それは一人の女子が言つた事から始まつた。

「大変だ大変だー！」

そう大騒ぎしながらクラスに飛び込んできたのは、先月クラス委員長に立候補してそのまま当選した。（といふか誰も他に立候補しなかつた）鳴子^{なるこ} 叶絵^{かなえ}であった。

「どうした鳴子、そんなに慌てて」

そんな鳴子に冷静な意見を述べたのは、浅黒い肌を持つ体術道場の跡取り息子。幸谷^{こうや} 大吾郎^{だいごろう}だ。

「何なんだろうと99・99%の確率で俺には関係無いね。三次元には興味無いし。

どうせだったら『美少女がこのクラスに転校してくるんだ!』的な俺様好みのビッグニュースが欲しかつたね」

いかにも「オツス、オラオタク！」とでも言いそうな感じのセリフを吐いたこの眼鏡は、女子から「鬼畜の菊池^{きくち}」という一つ名を受けられた。菊池^{きくち} 家康^{いえやす}。

クラス一の変態である。まつたくもつて死んでほしい。ハア・・・。

「ちょっとそれ酷くない？！鳴子と大吾郎とかなり差があるよね！」

？」

地の文を読まないでほしい。ああ、コイツの為に何行使ったか。勿体無い勿体無い。

「ホントに三人称！？泣いていいですか？！」

「ま、まあとにかく、何があつたんだ鳴子？」

菊池が虚空にむかって何か叫んだあと、いきなり泣き出してクラス中ドン引きになつてゐる中本題を切り出した少年は、この小説の元ネタになつてゐる「迷い猫オーバーラン！」原作主人公。都築巧である。

「ふつふつふ。よくぞ聞いてくれたね巧っちー実はこのクラスに転校生と復学生、計二人来るのさー！」

『…』

「しかも驚くなれ、一人とも菊池の『希望通り美少女なのだー！…』『うおおおおおおおー！』

「なんだと！それを先に言えー！」

今の一連の動作を簡潔に述べると、

鳴子力ミングアウト クラス全員驚愕 鳴子さらにカミングアウト
男共興奮＆菊池復活

である。

しかし、一目見て「美少女」と言われる瑞希（男）が哀れである。

「ふーん。ま、美少女だろうが何だろうが、このあたしの美貌には敵わないけどね！」

と、「ヒヤッハー！」と叫ぶ黒星さんもびっくりなこの天上天下唯

我独尊が似合^{うつ}しつさな「ちつさに言つなー！」・・・可愛らしい容姿の子は、この梅ノ森学園の校長の孫にして梅ノ森財閥の後継者。梅ノ森 千世その人。

「はん、そのちつこい体のどこにびぼーがあるんだか。是非教えて貰いたいわ」

そんな事を言つてゐるこのスタイル“は”完璧な少女は、都築の幼馴染にして喋る言葉の七割はツンデレ残りは暴言。口癖は「二回死ね」。芹沢 文乃^{ふみの}ご本人。

そんなこんなでこの六人（まだまだいるけど）、今後大きく物語に係わつてくる人達なのであつた。

「あんたなんかに分かるわけないでしょ。あたしからにじみ出るこのオーラが！」

「元々無いから分かる訳ないじゃん。あつたとしてもにじみ出てるんじやなくて、抜けていつてるんじやない？」

「抜けていく分もないあんたに言われたくないわよー！」

「なんですかー！？」

「なによー！」

ちなみにこの二人、言わずともがな仲が悪いのである。

* * * * *

H.R中、菊池と鳴子はと言つと。

「なあなあ鳴子。その二人はどれ位の美少女なんだ？」

興味津々の菊池。

てこうか興味津々じゃない方が菊池としてはおかしい。

「ん~、シニアの方の子は発育がまあまあ良かつたかな。ランクAくらい。で、ロングの方の子はペッタンコだけどスタイルが良くてす、」い美少女！ランクS！私も少し見とれたくらいだＺＥ！」

あれですね。AからDまでランク（「Yです）ね分かります。
ちなみにペッタンコなのは男だから。

「なん、だと・・・」（背景に雷）

こんなの、HRの時にする会話ではない。
周囲も同じような会話ばかりになってきた。
途中から来た先生、涙目。

「ああ、今日はこのクラスに転校生と家の用事で休んでいた子が来ます」

クラス中が静まった。

転校生イベントがある場合、普通逆の反応を取るであらわ。
なのにシーン。

先生恐怖で足ガクガク震えている。

「二人とも、入って来てください」

「「はい」」

* * * * *

ドアを開けてまず優さん、次に俺が入った。

優さんが入った瞬間「おおお～」という声が上がった。まあ当然だろ～。

だが俺が入った瞬間、クラスから歓声が消えた。ザ・○ールド？ 時は止まんないでくれ。

最前列でペンを回していた男子の手からペンが落ちた。
拍手をしていた手が止まった。

リボンを結びなおそうとしていた女子が固まって、リボンが落ちた。
前を向いていた男子の眼鏡がズリ落ちた。

「そ、それでは一人に自己紹介をし、してもらいます」

そして先生、なんであなたは足ガクガクで涙流してんですか。
なにこれ、なんでこんなにカオスなの？

「ふふつ、みんな瑞希さんの綺麗さに固まっているんですよ」

優さん、なーにバカな事を。俺男ですよ？（女子の制服着てるけど）
見てる、自己紹介で全てが分かる。

優さんは一步前へ出て一礼。

「貴様もんこんにちは。私、藤倉優と申します。
これから一年間よろしくお願ひします。」

とても聞きやすい発音だった。流石メイドさん。

優さんの自己紹介をきっかけに固まっていた人が動き出した。
魔法使い？ テ○ペル使えるの？

「どうやらかといふと、グラ○ジャの方が得意ですね」

あ、そりなんだ。てか知ってるのね〇F・・・・。
え？読心術には突っ込まないのかって？

A「慣れって凄いよね。

そういうや俺の番だった。一步前へ出て一礼。

「みやの」「いりこ富小路瑞希です。

特技は声マネです。

こんな俺ですが、よろしくお願ひします」

「どーだ！一人称を「俺」で言つてやつたわ！
これで誤解ナツシング！」

名前の最後が“ほ”だつたらエルダ 決定だけど。

偽名の理由はただ一つ。

“梅ノ森”学園に“有馬”はヤバいでしょ。
下手すると即退学だし。

そんな事を思つていると、なにやら向こうの方で「俺つ子美少女キ
ター！」なんて声が聞こえた。

他からも「キレーな声・・・」「ハスキーボイスだ・・・」「お姉
さま・・・」なんてのも。

・・・・・マジでエルダーの称号手に入れそうだ・・・。
てか誤解解いたよね？みんなふざけて言つてるだけだよね？

「瑞希さん。このクラスとて面白いですね」

優さんが満足しているならそれでいいか。
別に考える事を放棄したわけじゃないぞ。うん。

* * * * *

俺と優さんは一番後ろの席に一人で座る事になった。
いちばんうしろの転生者。

・・・ゴメン。言つてみたくなっただけ。

そのままHRは終了。直後にボーテの子と眼鏡の奴が来た。

「あつしの名は鳴子叶絵。生まれも育ちも鈴音町。このクラスの長
をやつている者でああ。何かあつたら呼んでくんna！」

女子にしてはかなり珍しい自己紹介だな。あつしつて何だよ。

「俺の名前は菊池家康。困った事があつたら誰よりも先に俺を頼つ
てくれ」（キリツ）

菊池は俺に手を差し伸べてきた。

やつぱりか。

可哀そうに。

「まず誤解から解こう。俺は男だ」

クラス中カッチーン。こりゃ金の針使つしかないか?
まあ予想してたけどな。

予想したくもなかつたけどな！

「え・・・ウソだろ?だつてお前、制服が・・・」

「仕立て屋が俺の性別を間違えた。そしてコイツを送つてきた。予
備もなかつたからコレ着てきた。OK?」

「ていうかもう女顔じゃん」

「それは生まれつき。何ならスカートの中見せてやろうつか?俺の青
いトランクスが視界に入るぞ?」

クラスのほとんどがビックリしている。え、何？誰も気付かなかつたの？まさかね。

「一応質問。この中で俺が男だと気付いた人、いる？」

シーン。

…………あーそうですかそうですか。
そういう事ですか。

「ちょっとくら川遊びしてくるわ……」

「…………ちょっと待ったあ！」」「」「」

俺がベランダに飛び出ようとしたら優さんを含めた五人が俺を止めにかかりつた。

「ちょ、ちょっと待てって！」

「どこで川遊びするつもりなの！？」

「あつちはダメよ！逝っちゃダメ！」

「早まるんじゃない！」

「待つてください瑞希さん！」

うん、ここいら辺でいいだろう。

「大丈夫大丈夫、俺別に逝つたりしないから。五人とも手放してくれ」

ジョークジョーク。てか本^{マジ}気じやなかつたし？演技だし？だから目からあふれてくる熱い何かもニセモンだし？別にむなしかつた訳じゃないんだからね！（シンデレ風味）

* * * * *

あの後なんやかんやで誤解が解けてあの六人と仲良くなつた。

なんやかんやはスルーでお願い。

男子からは名前で呼んでくれと言われ、俺は「瑞希」優さんは「藤倉」と皆から呼ばれることになった。

なんで俺は名字じゃないかつて? 偽名で呼ばれるの嫌だし。宮小路とか長いし。

放課後、巧の家兼ケーキ屋「ストレイキヤツツ」に招待された。中にいたのは巧の姉でオーナーの都築乙女さんと沢山の猫。店の名前に恥じないほど数はいた(推定十四以上)。乙女さんは体幹前方上部がボールみたいだった。要するにデカイんだ、アレが。

んでもって自己紹介終了後、いきなりハグをくらいましたよ。あっちとしては、これからよろしくの意味だったらしい。

だがその結果、頭の前半分がアレに埋もれた。アレは窒息モノだ。感触く窒息の法則。

ちなみに肝心のケーキだったが、努力賞受賞作。

あれなら俺が作った方がウマい。

自宅は学校から歩いて十分、ストレイキヤツツから三分の所にある二階建て一軒家。

そこで俺と優さん一人で住んでいる。

最初かなり抵抗があつたが、流石にもつ慣れた。

今なら優さんのマッパを見ても「風邪引くから服着な?」と平然としていられる。

それを優さんに言つたら。「うつてた。なんですか?

それはともかく、今日一日でこの世界の事についてかなり分かった。

初めはプリンセスでラバーな世界に転生したと思っていたが、どうやらここは迷い猫オーバーランーの世界らしい。

はつきり言って今更だな、という話である。だが、疑惑が確証になるにはこれだけの情報が必要だつた。

それともう一つ、不思議に思つてゐることがある。

転生前の記憶保持である。しかも忘れる事も薄れる事も十六年間一度もなかつた。

おかげで原作知識も忘れずにいた。これに関してはよかつたと感じている。

この世界の歯車は高校一年の夏一步手前位から廻り出す。

それまで俺は覚悟を決めておかなくてはならない。

“原作介入”という覚悟を。

第2話 自分の姿を気にしてないからいいつむる（後書き）

次回原作一巻まで飛びます。

優さんと鳴子のキャラがいまいち分かりません。
ちなみに作者は家康が嫌いな訳ではありません。むしろ好きです。

（笑）

駄文でホントすいません。

第3話 未だヒロインが登場しないのもひつとも思つ（前書き）

かなり遅くなりました。

あと、感想がユーチャー限定になっていたので解除しました。
どんなことでもいいので感想をお願いします！

第3話 未だにヒロインが登場しないのもどうかと思つ

学園に来てから約二ヶ月が経つた。

オチとしてこの二ヶ月の間に色々あつたと伝えておこう。
まずクラスに慣れた。いや、正確にはクラスが俺に慣れた。
やはり不自然な時期の編入生だからか、最初の頃は六人以外誰も話
しかけてこなかつた（本当は瑞希が女顔で、しかも美人だからどう
対応していいかわからなかつたからだが、その事を本人は知らない）
。

逆に優さんはその性格の良さでどんどん交友関係を広げていた。そ
の事実を知った日の夜、俺は枕を濡らした。

巧、家康、大吾郎の三人とは特に仲良くなつた。今では「クラスの
男四人組」のポジションになつてゐるくらいに。

・・・今男四人組の「男」の部分に疑問を持つた奴、少し頭、冷や
そうか。

勿論ストレイキヤツツにも足を運んでいる。ていうか、運びすぎて
ついこの間苦労が増えたばかりだけど、その話はまた後で。

入学して一週間くらいから妙に視線を感じるようになり相談してみ
たところ、家康から俺にファンクラブができたらしくと聞かされ、
視線の正体はそれだという。

名を「宮小路瑞希様護衛隊 みやこじ みずき まこと M M M」。それなんてSHU FILE?
あと俺が優さんと同棲している事はまだ誰にもバレていない。バレ
ると実家の事も同時にバレそудし、何より腐つてゐる奴らが五月
蠅くなるから。

え？男子とかじやないのかつて？そんな君に教えてあげるよ。

「お前じやあ女子と絡んでもバツクが百合の花だからなあ」 b y 菊

池家康

その後、家康はMMMと楽しきフルボットにしました。

それから有馬財閥後継者披露宴なるものに参加させられた。

そのままの姿で出ようとしたが梅ノ森（娘）が何故か来ていたので、眼鏡をかけて髪を肩の所で一つに結び、声を水槽かりに変えてステージに上がった。まんまとS+T+Sのユー。祖父からは「何故そのような格好をしてある」と少し睨まれたが、事情を説明したら「そうだったか。すまん」と謝られてしまった。若本ボイスで謝られる

と、かなり迫力があつた。

その時に竹馬園 夏帆なる人物と出会ってしまった。この人、あんまし好きじゃない。特に六巻で幻滅した。

しかもなんか「仲良くしてくださいまし」オーラがビンビン伝わってくるからスゲーウザイ。

あの時祖父が呼んでくれなければキレていたかも知れない可能性有り。

帰りの車（まつ黒のリムジンだった）の中で、「瑞希さんは竹馬園様の事がお嫌いなのですか?」と優さんが聞いてきたので「E x a c t l y!」と、とてもイイ笑顔で即答した。

「これほどまでに濃い一ヶ月間を過ごし、俺は七月九日を迎えるのであつた。

* * * * *

朝。

目を開けると白い壁が視界いっぱいに広がった。

「知ら・・・なかつたらホラーだな。ここ血室だし」

寝起きのテンプレなセリフは言わないぜ!

「瑞希ちゃん。朝ですよーーーって起きてこらるんですね」

「あー優さん。おはよ」

「おはよハジマス。もつ朝食の準備はできでこまますよ」

ちなみに一つもは優さんで起きてもらつてこる。今日またまたま。優さんがこの家に来た時に「瑞希さん専属メイドとして、この家の家事は全部私が行います!」と堂々の宣言をしてくれた。

別にかまわなかつたが、軽いノリで「ヤンデレだけにはならないでね?」と言つたら「十九話、怖かつたですねー」と返してくれた。どうして優さんはこいつのネタを知つてこるのかが不思議でならぬ。今度聞いてみよ!。

とりあえず今は朝食の事を考えソ「あのー瑞希さん」

「どうしたの優さん?」

「自分で言つのもなんですが、ツツコまないんですか?」

何によ?優さんのオタク疑惑に?

それは今じゃなくてもいいだらう。

「その·····私の格好に·····」

「別に。だつて優さんエプロン付けているだけじゃん」

「ええ!?そ、それだけなんですか!?」

「まあ、エプロン“だけ”つけているけどさ。それが?」

そり、今優さんは普通二次元でしか見られないような格好をしているのだ。

その名も、「裸エプロン」

「それが?つて·····はあ·····」

「?」

他の奴は知らんが俺別に興味無いし。どうらからつてこうび
興奮くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
疑問 風邪引かないか心配
だし。

「 もひいですよ。早く下に降りて来てください・・・」

「 何をそんなに気にしてこらんだか。
ま、いつか。

朝食を食べ終え、身支度を整えて家を出よつとした優さんと俺は

「 アンタなんか、死んじゃえばいいんだ! 」

と罵声を浴びせた。ああどう出るかな?

そしたら急に優さんが左胸を苦しそうに抱きながら玄関で倒れた。
と思つたらすぐに立ち上がり、何事もなかつたかのよつて

「 学校に行きましょつ瑞希わん。こつもより少し遅れています」

と告げて家を出た。

本当に知つてたんだ十九話・・・しかも動作も完璧に・・・。

本当に優さんは何者だ?謎は深まるばかりだ。

* * * * *

遅れを取り戻すために小走りで学園に向かい、そのまま昇降口に到着。そのままのノリで教室に向かおうとするとい、階段の踊り場で芹沢を発見した。

「おはよ。何してんの？」

「芹沢さんおはようございます」

「おはよう瑞希、藤倉。別に何もしないけど」

嘘つけ。語尾が若干イラついていたぞ。
何をそんなに・・・・って、ああ成程。
一応優さんにも確認とるか。

「（優さん、芹沢のイラつきって）」

「（ええ、アレでしょうね）」

優さんも同じ結果にたどり着いたか。

まー「イツのストレスの原因なんてハ割方アレだしね。（残り一割
は家康）

「あー、先に行くが言つておくぞ芹沢」

「何？あたしに構わず教室いっても気にしないけど」

「巧、上履きなかつたからこっちと別ルートで教室に行つたと思つ
ぞ？」

「つ！？」

「あんま見栄張つてこないで残つていたらMR遅れるからなー」

最後はもう動きながら言った。

ふう、これだけ言えば大丈夫だろ。

思つたとおり、芹沢は俺達を追い越すより早歩きでこっちに向か
つてきた。

教室に到着。同時に芹沢も到着。そして思いつきり扉を開けた。

・・・うわー。この光景に慣れた自分が嫌になつてくる。

巧が梅ノ森に撫でられていた。しかも身長差があるために巧が屈ん

でいる。

やつぱり知識として知っていても、生で見るとキツイな。

「男としての誇りは無いのか、都築」

大吾郎にまで言われている。

「こう」とは前に家康からも何か言われているだろ? な。
おっと、ここでの芹沢の反応は・・・。
せりざわのれいとうビーム! (田から)

「うかはばつぐんだ! (巧限定)

「巧・・・変態だつて噂は本当だつたのね・・・。幼馴染みを返
上したいわ」

幼馴染みを返上したい奴初めて見た。

「まーた弱味握られちゃつて。あれですか、巧くんはこれとフラグ
立てようとしていますか? やめとけやめとけ、そんなアブノーマル
な関係。あと三次元は二次元と違つてイイ匂いとかしないんだぜ?
くんくん・・・・・ほほつ・・・・・濡れた子犬の香り。つまり獸
臭い。うおつ!」

「ちつ、外したか」

家康に梅ノ森のアッパーがヒットしそうだったので、家康の首根っこを掴んで引いてやつた。

「・・・何してんの、お前

一応聞いてみた。

「おお、瑞希！今オレは巧に一次元と三次元の違いを呈示しているところだつ！」

「どちらかと言つて、お前が梅ノ森の頭の匂いを嗅いでいるところに見えたが？」

やつぱ助けなきやよかつたかなあ。

「・・・・・頼む相手くらい選べばここのに

ぼそつと芹沢が一言。

あーあれか。「梅ノ森なんかより私に頼りなさ」よー」的な感じか。でもそこは嘘つとひー。

「へえ？あたじじゃ力不足だつて言いたいの？」

ほら。

優さんもひの後を予想して避難している。正しい判断だ。

「あら。そんな」と言つてないわよ。それとも心当たりもあるの？」

「なんぞやうなるのよつー」

あーあ、始まっちゃつた。

収まるまで時間がかかるんだよなコレが。

ヒヒで俺の選択肢は三つ。

1、割り込む（死亡覚悟で）。

2、傍観する（とばつちりを受けるかも）。

3、逃亡（巧達を放置して）。

・・・・・ 一つで十分だったな。
よし、逃げるか。

「おはよー鳴子」

先月あつた席替えで隣になつた鳴子に声を掛け着席。
ちなみに場所は「の川（これ分かる？）の前から三番田（縦に四列、
横に五列ある）の右側が俺の席。

「オッス瑞希つちーなんだか朝から疲れているねー」
「アレのせいだ。アレの」

龍虎激突の方に指を向ける。

「何度見てもあの二人、仲いいねー。妬けるゾエー。」
「眼科行け。そして眼鏡〇・コンタクトの選択をしてーー」

お前はあれをどう見ているんだ。明らかに「喧嘩するほど仲がいい」
の範疇を超えているだろ。

しばらく鳴子と駄弁つてるとチャイムが鳴つた。
あいつらにひとつでは試合終了のコングだらうな。

「とりあえず第一ラウンドは終りました。今後どうなりますかね
へ、実況の富小路さん」
「一時間田に第一ラウンドを始めないでほしい」

それだけは勘弁してほしい。

「ところで大吾郎よ、なぜにお前は突っ立つている?」

「瑞希・・・喧嘩を止めるといつのまでも難しい事なのだな・・・

・・・」

「は?」

* * * * *

放課後。

なにやら巧の席に家康と大吾郎が集まっていたので、俺と優さんも参加させてもう一つ事にする。

「おーい巧、またなんかあつたか?」

ちなみに「また」なのは、巧の姉の乙女さんが毎度毎度リトモびっくりのトラブルを持つてくる(起こすとも言つ)からだ。しかも持つてくる(起こす)度にストレイキヤツツからいなくなるのである。

オーナーの自覚、あんのかなあ?

「瑞希か・・・・・姉さんが、また生き物を拾ってきたんだ」「んん? それのどこがトラブル? いつものことじゃないの?」

「これまでにも、よく耳にした話ですね」

「前の事件よか穏便な話じやん」

一つの家族をヤクザから逃がすよりかはな。

「そうだけど、今回に限ってはそうじやない」

「じゃああれか、拾つてきたのは猫耳生やしたグラマスな宇宙人か?」

もし本当だつたら即刻沖縄に帰してあげなさい。

「いや違う。今回乙女姉さんが拾つてたのは、ヒト（勿論地球人）
。それも女の子なんだよ」

巧は俺達にこれまでの経緯を教えてくれた。

夕方、家に乙女さんがいきなり帰つてきた。
その時に女の子といつしょだつた。

女の子の名前は霧谷希。

乙女さんがこの町のどこかで拾つたらしい。

無口でほとんど無表情。

だけど、髪を留めているリボンをいじる時は少し笑顔になる。
なんでもこの町に探している人がいるという。

ゴミゴニケーションが難しく、それ以外の情報は不明。

らしい。

たしか原作では村雨学園から逃げている途中で乙女さんに拾われた
はず。

でも“探している人”なんていなかつたはずだ。
何かが引っ掛かる。

かなり重大な、そしてとても大切な何かが・・・。

第3話 未だヒロインが登場しないおひつかと懸つ（後書き）

次回でやっとヒロイン登場です。
優さんのキャラ崩壊がビデー。

そして梅ノ森が空氣・・・。

文才の無さを痛感します。

次回は梅ノ森の暗躍（笑）です。

第3・5話 主人公に抜かりはない（前書き）

「一週間ごとに投稿！」

そんな事を言つていた時期が僕にもありました。
今回は最近影が薄い彼女のお話。

第3・5話 主人公に抜かりはない

Said 三人称

学園の中で、最も新大陸そらに近い場所 それは告白や授業サボリ、ゾンビになつた幼馴染みの恋人の頭をぶつ叩く所。

屋上である。

眼下に広がる街並みを見下ろしながら、梅ノ森千世はフンと鼻を鳴らした。

その視線の先には、六人の男女がいた。

都築巧、菊池家康、幸谷大吾郎、そして少し離れて芹沢文乃と藤倉優と宮小路瑞希が歩いている。

あの六人は、何かを隠している。

それが千世には、なんとなく気に入らない（実際の所、梅ノ森が巧達から話を聞かなかつただけで、自業自得な話なのだが）。

「…………で？都築たちは何の話をしていたの？」

まるで独り言を呟いているかのように、千世が言った。

これで後ろに一人のメイドが居なければ、完全にイタイ子扱いだ。彼女達は、学園都市が誇るレベル5の電撃使いとレベル4の空間移動能力者……

ではなく。

梅ノ森家に仕える使用者の子女達であり、千世の私的なメイドである。

「断片的にしか聞き取れませんでしたが…………また、あの都築乙女が面倒なトラブルを持ちこんだようです。何かを拾つてきましたとか、そのような会話をしておりました」

「なんか、前にも似たような話を聞いたような気がするナビ。猫か犬を拾つてきたって」

「今日は事情が違つと、やのよひな」とも言つてました」

「ふうん・・・・・・・・」

それにして、だ。

本当に毎度毎度、飽きもせずに面倒事を持ちこんでくる女だ・・・・・・と千世は思う。

たかが姉の分際で、この梅ノ森千世の下僕たる巧を口キ使つとは。（たかが同級生の分際で、人の弟を勝手に下僕扱いとは（笑））その一事だけでも、実に許し難い。それに、どうにもある都築乙女のいう女は苦手だ。

千世は過去数度、乙女と会つて話したことがあった。どれだけこつちが威圧的に攻め込んでも、ヘラヘラ笑つて柳のよう受け流される。

『かわいいー』とか、『抱っこさせかわー』とかぐりぐりなご回され・・・・・。

あげく豊満な胸で窒息させられかけた。

暖簾に腕押し、糠に釘、巧にアプローチ。

気がつくと、こつしかあちらのペースに巻き込まれてしまつ。

おもしろくない。寒におもしろくない。

都築巧は梅ノ森千世の下僕であつて、芹沢文乃のペットでも、都築乙女の子分でもない（前提が間違つていぬ）。
そうでなければならぬ。あたしだけの。

「『J』べるー。引き続き、あの六人のあとをつけ詳しく述べておくれー」「

両手でフェンスの網を掴みながら、千世は指示を下した。

豆粒のように小さくなつてゆく巧たち一行の姿を、じーっと追い続

ける。

「都築は、あたしの下僕なんだから」

文句あるか、と言わんばかりに、千世はそう呟くのだった。

* * * * *

S a i d ? ? ?

「文句あつまくりだつつーの」

俺は梅ノ森に仕掛けた盗聴器から一部始終を聞いていた。なるほど、あのメイド一人がスト キングしているのか。

「二人に話を聞かせないよ」ジヤミングしておいて

「はい。分かりました」

俺と同じように盗聴器から話を聞いていた従者に妨害電波の発信を許可した。

これで一安心。

「でも、いいのですか？」

「ん、何で？」

「いえ、梅ノ森さんはただ寂しがっているだけなのではと・・・」

ああ、成程。

やつぱり優しいな。

「寂しがっているからこだよ

「？」

「寂しいくせに、素直になれないあのお嬢様に思い知らせてやるの
だ」

「う、分からせてやるのさ。

『“自分から動かなきゃ始まらない”ってね』

第3・5話 主人公に抜かりはない（後書き）

投稿は2～3週間でしたいです。

11／1優さんの口調を変更。

ウチの優さんは原作よりもフレンドリーですから。

（笑）

感想待つてます！

第4話 キーワードで「シリアルスイッチ」と書いたはずなのに・・・(前書き)

今回は二話の残りから書いたので一週間で投稿できました。
次回からはいつも通り2～3週間かかります。

10／21修正。瑞希の口調が荒っぽかっただので。

第4話 キーワード「シリアルスイーツ」って書いたはずなのに・・・

「ぶつちやけた話、警察に届け出た方がいいんじゃないの？」

下校途中、家康からもつともな意見が出た。

「警察・・・？」

「いや、だつてそうじやん？その乙女師匠が拾つてきた女の子つてのは、オレらと近い歳っぽいんだろ？」

家康が乙女さんを師匠と呼ぶ理由は一巻53P参照。

・・・・スマセン。説明します。

とは言つてもカツアゲされそうになつてゐる家康を、乙女さんが救つたつてだけの話だけ。

家康曰く「唯一認める三次元女性」らしい。

「つてことは、家出少女つてセンも考えられるわけだ？家族が心配してゐるんじゃないのか？ま、乙女師匠なら、その辺のことを考えないはずないとと思うんだが・・・」

家族つか、村雨学園長が心配していると想つけどな。
だが、ここで警察に届けさせるわけにはいかない。

霧谷希の為に！そして大人の事情の為に！

「色々考えるよりも先に、乙女様やその方から話を聞かなければいけませんね」

「まあ、その通りなんだけどね」

「優さんナイス！これで警察フラグは立たないぜ！」

でもさ、そしたら今までの会話は何だったんだううう……。
行数稼ぎだと思われんじやん。

「（）で俺はお別れだな
「私もここまでですね
「え？ 瑞希と藤倉はストレイキャッツに行かないの？」
「まあ、色々あつてな

俺の原作知識が正しければ、この後に霧谷希のマッパを見るハメになる。

芹沢の蹴りを俺は食らいたくない。

「それじゃあな
「皆さん、お気をつけで
「ああ、またな
「瑞希達も気をつけろ
「一人きりだからって、にゃんにゃんすんなよぐはあー
「・・・・・じゃあね

家康よ、お前の死は無駄にはしない。

* * * * *

夜。

風呂からあがつてラノベを読んでいると電話がかかってきた。

「はい。あつ、宮小路です

危ねー。名前間違えるといひだつた。

『瑞希？都築だけど』

「巧か。どうした。例の子関係か？」

『いや、明日さ、創立記念日だろ』

「ああ、あの理事長が気まぐれと思いつきで学校作ったアホの日だらう？しかも日にちが七月十日だから納豆の日つていう」

うちの理事長は金錢感覚と頭が狂つてゐるんだと思つ。

『そうやつ。それでさ、朝からケーキ作るんだけど、来れるか？』

「何時から？」

『五時半からなんだけど……』

「大丈夫。じゃあ明日五時半にストレイキヤツツの前に来るから

『頼む、ありがとう』

そつ、これが“この間増えた苦労”である。

前に一人でストレイキヤツツに来た時に「今日はもうお客さんも来ないし、皆でケーキを作ろう」などと乙女さんが言いだしたのがきっかけ。

その場にいた巧、芹沢、家康ら全員が、なんかもう諦めムードを漂わせていたので、特に反論せずに俺もケーキ作りをする事にした。だが、ここで事件が発生。

俺は作り方を知っていたので、勝手にケーキを作ろうとしていたら

「あれ？瑞希君、ケーキ作れるの？」と聞いてきたので肯定すると

「じゃあ腕前見せてもらおうかな」なんて事を言つてきた。

そのせいで他の奴も乗り気になり、ケーキ作り大会がケーキ作り勝負になつてしまつた。

しかも、俺が作ったケーキを食べた乙女さんが、ストレイキヤツツにスカウトしてきた。勿論俺は断つたのだが、乙女さんが「お願ひ！君だけが頼りなの！」と、涙目で俺の手を握つてくるので、逃げに逃げられなくなつてしまつたのだ。

そりで、俺のケーキを食べた他の奴らも

「頼む！うちにはケーキを（一応）まともに作れる人が乙女姉さんしかいないんだ！」

「うまいなコレ！なあ瑞希、今度俺になんか作ってくれよ。そして藤倉に頼んであーんしてもらどははつ！」

「おいしいじゃない。これくらいの作れるんだつたら、手伝つてあげればいいじゃん」

などと言つてくる。（一人処刑執行）てか、なんかケーキ屋としてあり得ない事を聞いた気がする。

まあ結局、週に三日の約束でOKしちゃつたんだけど。

その後、町中に「ストレイキヤツツに偶に現れる美人パティシエ」と「ストレイキヤツツのケーキが美味くなつた」という噂が流れた。後者は嬉しいけど前者はお断りだ。

そんな事があり、今やストレイキヤツツの三分の一のケーキを俺が作つてているので、偶にソフト以外の日も手伝つのだ。

* * * * *

七月十日、朝。

優さんに無理を言つて四時に起こしてもらい、家を早めに出て散歩をしていたところ、不思議な光景を目の当たりにしていた。

「うー・・・・たのむからいえにかえしてくれー・・・・
「だらしがないぞ、菊池よ

和服の肌が浅黒い少年と、それに引きずられている眼鏡の少年。
うん、あいつらだ。

「おーい、大！」「おお！あなたの今の動き、型、もしゃ太極拳ですか？」
「おーい」

「ああ、そうさあ。なんならお兄さんもやつていいかい？」
「いいのですか！？では是非！」

お前ら、まず人の話を聞け。

お婆さん、あなたは誰ですか？

そして大吾郎よ、家康を置いて行くな。

「うーん、たくみのいえはビーハー···あつ」

こんなにフラフラじやねえかよ。しかもコケてるし。
仕方ない、コイツも連れて行くか。

「大丈夫か？」

「ん···だい丈夫です“お姉さん”」
「···」（怒）

そ ん な に 死 に た い の か

とは言つてもコイツもある意味被害者か。

うーん、どう始末してやろうか。

···

···よし、これにしよう。

ポケットからゴムを取り出し、髪をポニーティに。

そして声を変え準備完了！

「そう？大丈夫ならいいのだけれど。それより、ビリしてこんな時
間に？」（じ／＼田中 恵）

精神的に参らせる事にした。

「友達に別の友達の家の手伝いをして行こうと朝四時に無理矢理誘われて連行されている途中にその友達が公園で太極拳をやっている婆さんに話しかけてそのままいつしょに太極拳をやる事になつて俺を放置したんですよお姉さまああああん！」

事情を説明し終えたら、こきなり俺（女装中）に抱きついてきた。スゲー嫌なんだけど。
だけど今、俺はお姉さん。（のフリ）だから俺は家康を抱きしめ返してやつた。

「とても大変だったのね。よく頑張ったわ。代わりにお姉さんが一緒に付き添つてあげる」（こゝ田中 恵）

「え、でもいいんですか？」

「いいの。私も今暇だから。それに……」（こゝ田中 恵）

「こゝで少し恥じらうフリをして。

「……君にも少し興味があるしね」（こゝ田中 恵）

「え！？」

「ふふふ、まあ行きましょう。どこの？そのお友達の家は」（こ

ゝ田中 恵）

「は、はいーえと、こちらですか」

あは、あはは、あははははははははははははは
マジ、たのしー！

* * * * *

只今五時

俺（女装中）と家康は巧の家に到着した。

移動中に家康の事を聞いたり、どんな子が好きなのかを聞いたり、結構おちよくなつてやつた。

しかも話の途中途中でオタク嫌いを匂わせる発言をしたので、家康のオタク発言抜きのガチトークが聞けた。

いやー結構騙せるもんだな。これならエルダ も可能だな。
アレ?でも騙せる=分からないつて事は、
分からない=それほど女っぽいって事じや . . . 。
うん、あまり深く気にしないことにしよう!（現実逃避）

「言ひとくけど、オレはヤダって言ひたんだぞ。なぜ朝っぱらから電話せにゃならんのだと」

そして家康は巧に電話中。

『家康か？家康・・・・・だよな？お前、いま何時だと思つて

』

「五時だ！しかしオレが叩き起されたのは、四時だッ！－誰に叩き起されたつて！？決まってる。朝の稽古をしていたら、ふと都築たちのことが気になつたのだ。これから一緒にやつの手伝いに行こうと思うのだが同行してくれないか、なあに都築なら早朝から洋菓子の仕込みで起きているから心配はない、任せておけ。とか言いだして、オレが起きてるかどーかは考慮の対象外だったアホですよ！ヒントは、ふんどし！」

『・・・・・大吾郎か』

「おお、そいつだ。そのバカだ。ちなみにそいつは今、公園で太極拳やってた婆さんと意氣投合して一緒に遊んでるときだ」

『お、おい・・・・・別に無理しなくても』

「もう手遅れだ。だつてオレ、その公園で出会つたチョー美人のお姉さんと一緒に店についたやつたもん。いまねー、店の前」

ストレイキヤツツの一階の窓のカーテンが開かれた。
そこから巧がものすごい目を見開いてこっちを見ていた。

「やつほー」

家康が巧に手を振っていたので、俺（女装中）も笑顔で小さめに手を振った。

そしたら巧が少し顔を赤くしていた。
え・・・・・ 気付いてないの？
てか顔赤ぐすんな。

『・・・・・すぐ、そつちに行く』

「いや、別にいい。むしろゆっくり来て。俺はまだお姉さんと楽しくお喋りしたいから」

巧、なるだけ早く来て・・・・。

十分くらい家康とお喋りしていると、むこうから芹沢らしき人物がやってきた。

「菊池、ぐ、偶然ね。こんな所で会うなんて。ところで、何してんの？」

「偶然かあ？まあいいけど。俺は～中略～で、巧を待っているところ。で、芹沢は？」

「あ、あたしは散歩してたら、たまたまここに来て、アンタと知らない女人の人気がここに立ってたから気になつただけよ」

嘘つけ。どう見ても狙つてここに来てんだろ。

あとお前も気付かないのか。

芹沢が来て十分ぐらい経つと、ストライキヤツツのドアが開いた。

「文乃…………？」

「うつやご。黙れ。早く中に入れなさい」

うわー、巧に会つたとたんに不機嫌度アップだよ。本当は嬉しいくせに。

ソンドレって面倒だな。

「ていうか、なんでこんな朝っぱらここ？」

「朝の散歩してたんだとさ。そしたら“たまたま”店の前を通りかかる。そこにオレとお姉さんが立つてたから不審に思つたんだってよ」

んな訳ないよなー普通。

もひといマシな言い訳しろよ。巧、顔が若干引きつっている。

「なんなの、何を始めるつもりなのよ」

芹沢が、巧と家康と俺（女装中）を交互に見つめた。
別にケーキ作りに来ただけですけど何か？

「大吾郎は？」

「来ないね。もうアイツの存在は忘れてしまおうかと思つ

おこおい、忘れてやるなよ。

「代わりに、」のお姉さんを招待しようと思つ。巧、別にいいだろ

「うーー！」

「ま、待てって。とりあえず、この人は誰なんだ？」
「やつよ。やつきから凄く気になつてたんだけど」

お前たちのクラスメイトだよバーカ！（泣）
いい加減誰か気付けよ！

「この人は、公園で大吾郎に捨てられたオレに手を差し伸べてくれた優しい人なんだぞ！」

「そ、そなんですか？」

「ええ、概ね間違つて無いわ」（こゝ田中 恵）

性別以外はな。

「珍しい。あの三次元嫌いの家康が・・・」

「この人に勝てる美人なんて乙女さんくらいいじやない？」

「いや、乙女姉さんでも厳しいぞ」

好き勝手言いやがつてこの野郎共。
今から現実つて奴を教えてやる。

「そういうえば自己紹介をしていませんでしたね。私、宮小路瑞希と
言います」（こゝ田中 恵）

「「「ゑ！？」」

「だあーかあーらあー」（こゝ田中 恵）

いくぞ家康、体力の貯蔵は十分か？

「寝ぼけてたからつて女装もしてないのに性別間違えてんじやねー

！」

「ぐつはあああー。」

一蹴！

* * * * *

家康処刑後、大吾郎も来たので事情を説明。

「で、何？結局全部アンタの勘違いってこと？」

「ふあい、ほうでふ（はい、そうです）」

「お前らも気付かなかつたけどな」

「だ、だつて普通気付かないでしょ！髪型と声変えられちゃ」

「ポニーテも体育の時見せた事あるし、何より顔は同じだ」

「うつ」

もういいよ。

俺が本氣で女装したら、中学の時みたいな事になるし。

「それで、例の娘はどうした？」

「例の娘つて、希のことか？リビングで猫の相手をしてくれてる。言つておこう、ヤツはかなりの手練れだ」

「なん・・・だと・・・・！？」

家康復活。

「ていうか、もうじゅうぶん様子を見たので家に帰つていいですか

と思つたら「イツ帰る？？」としてる。
絶対に帰らせん。

「やついや俺と家康がここに来るまでの会話、録音してたんだよなー。今ここで人数が減つたらこのボイスレコーダー流しちゃうかもしれないなー」

「瑞希様、誠心誠意お手伝いさせていただきます」

帰宅阻止。

へつ、良いサー、ヴァントゲットだぜ・・・。
しかも令呪いらす。

「瑞希、お前以外と黒いな・・・」

なにをおっしゃるたくみさん。

ソンナコトナイヨ? ホントダヨ?

「まあいいけど。さて、始めるか」
「話つとくけど、手伝わないからね」

じゃあ帰れよお前。

「やつが、じゃあ卵を持つてきてくれ。冷蔵庫にまだ一箱あるはずだから」

「手伝わなって言つてるの?」

とか言いながら冷蔵庫に向かつのは、ジリのシンクトレンさんかな? かな?

あと巧、合掌なんかするなよ。仏壇でもあるまいし。

「なんか、ケーキ作るのを手伝いにくるのせ、ずいぶん久しぶりの
よつな氣がする」

「前は好き勝手にケーキ作つただけだもんな」

「そうだな、前回に来たのは正月だっけ？」

「いや、もつと前。たしか去年のクリスマスだ」

去年のクリスマス。

確かに学校でクリスマス会をした。

女子の高梨がミニスカサンタの衣装を持つて来ていて、それを俺は無理矢理着させられた。

さらに女子の森から化粧道具を借りて、本格的に俺を女装させた。仕方がないのでその格好で教室に入ると、男子のほぼ全員が前傾体勢になるという事件が発生。

ならなかつた奴も、鼻を押さえて教室から出ていくという始末。その時、鼻を押さえている男子の指の間から赤い何かが見えた。初めてクラス男子に殺意を覚えた瞬間だった。

「ど、どひした瑞希？なんかスゴイ顔になつてるぞ？」

「気にするな。さて、まずスポンジを焼くか」

先にスポンジケーキだけを焼いておく。

そうすれば、いつでも生クリームなどで仕上げられるからだ。

「いつも通りジョノワーズでいいんだよな？」

「ああ、頼む」

ジョノワーズ生地。^{きじ}

卵を卵黄と卵白に分けず、一緒に混ぜて作る生地の事である。

「大吾郎、混ぜるの手伝ってくれ」

「む、承知した。力の限り混ぜてみよ」

「普通にハンドミキサーで手伝えバカ」

お前は本当に現代人か？
週に七日は寝う。

「家康、お前はケーキ型にクッキングシートを敷いて」「おつと、オレに仕事を任せていいのか？知らんぞ？」

「眞面目にやらなかつたら、ボイスレコーダーを昼休み中ずっと流す」

「瑞穂様の命令、必ずや果たせて見せます！」

いやー、本当に令祝いらずのサーヴァントだなー。

「おつはよ～お

俺らが作り始めてから五分くらいして、誰よりも遅く、このケーキ屋の正式なパーティシ^{アルバイト}エイジ工^{アルバイト}が登場。

乙女さん、頼むから俺^{アルバイト}よりは早く起きてくれ。

もう無駄だと思いつつもそんな事を考えていると、乙女さんの背中から女の子が顔を覗かせていた。

その子の顔を見た瞬間、頭の中で全てのピースがはまつた。

“知識”と言うパズルに“記憶”と言つピースが。

そうか。

そう言う事か。

確かに“知識”では知つても”だな。
相手も気が付いたのだろう。

俺の傍に駆け寄ってきた。

「みづきつー！」

嬉しいな。覚えてくれていたのか。

俺があげたそのリボン、着けた姿見たことがなかつたけれど良かつ

た。

とても良く似合っている。

沢山話したい事があつたけど、今はこの言葉しか思いつかない。

「久しぶり、のぞみちゃんハグフッ！」

彼女 霧谷希＝のぞみちゃんからのハグといづかのタックルを受け、後頭部を壁にぶつけた。
空気、読めよ壁・・・・・。

クロノレベルのＫＹな壁を恨みながら、俺の意識は飛んでいった。

第4話 キーワード「シリアルスイッチ」について書いたはずなのに…（後書き）

ひとつひとつの記事でヒロイン登場…。
のはずが…。
感想待つてます。

第4・5話 だから前回ポーテールにした（前書き）

すいません。かなり遅れました。

正直この話は無くてもいいのですが、原作の希とこの小説の希の想
いが違うので、そこを感じてほしくて書きました。

勿論、原作を読まなくても分かるように書いたつもりです。

第4・5話 だから前回ポーテールにした

Said 三人称

AM5:33。

霧谷希は起床した。

いや、したと言うよりさせられた。

一階の方で、同級生の男子を年上の女性と間違えた男子が強烈なミドルキックを食らったような音が聞こえたからだ。

希は起き上がろうとして、体が動かない事に気が付いた。足先や指先は動くのだが、所々の関節が動かない。

しかも頭だけは左右を何か柔らかい物でガツチリ固定されている。

「ううん……」

そんな時頭上から、眠たげな声が聞こえてきた。

「ふわああ～・・・んー？あ、のぞみちゃんだあ～。おはよ～」「・・・・にゃあ。乙女、おはよ～」

声の主は都築乙女であった。

乙女は希を抱き枕のようにして寝ていたので、希は動けないのだ。ちなみに頭を固定しているのは乙女の母性の塊である。

「・・・・・乙女、動けない」「ん～、もうちょっとこのまま～」「・・・・・わかった」

この家に来てまだ一週間も経っていない希だが、『乙女の行動にい

ちこちつゝこまない』という暗黙のルールを既に肌で感じ取っていた。

* * * * *

あの後十分くらいいこの女の抱き枕になっていた希は、顔を洗いに乙女と一階まで下りていた。

「希ちゃん、乙女の生活には慣れたかな？」

「…………」

希は答えられなかつた。

無論、施設での生活と比べれば、乙女の生活は天国と言つても過言ではなかつた。

いつも二口二口じていて、傍にいるだけで心が温かくなるような乙女の。

いきなり家に来たのにも係わらず、自分を気遣つてくれる優しい巧。そんな二人と一緒に過ごしていただが、慣れたかと聞かれれば、簡単には首を縊に振れなかつた。

それは、自分がこの一人に迷惑になつていいかといつ不安と、瑞希の事があるからだ。

有馬瑞希。

十年前、既にあの頃から周りに人がいなかつた自分に話しかけてくれた、霧谷希唯一の“友達”。

自分みたいな子と遊んでくれて、別れ際には自分が使つていたリボンをくれた。

彼と遊んだ時間は、この十年間の中で一番の思い出だつた。

だから、第四村雨学園

施設から抜け出す時に行く事にした目的地は、彼が住んでいたと言つていた「すずのねちょう」という所にした。

だが、まだ彼とは会えていない。

もう彼は「この町からいなくなってしまったのだろうか。

「大丈夫。絶対見つかるよ」

気が付けば、髪留めの青いリボンに手を伸ばしていた。それを見てか、乙女が声を掛けてくれた。

やつぱり乙女は優しい、と希は心が温かく

卷之三

「む、承知した。力の限り混ぜてみよう」

「普通にハンドミニギターで手伝えバカ」

そんな時、厨房の方から甘い匂いと共に声が聞こえてきた。

「お、おれがうなづかれてるやつだよ！」

〔二〕

「…乙女は、しないの？」

• • • • • • • • • • • • • • • • •

にやあ、忘れてた

「アサヒ」

乙女の行動にいちいちつゝく（ry）

＊＊＊＊

洗顔後、乙女は厨房に重役出勤した（忘れていたとも言つ）。

「おひはよ～お 」

したにも関わらず、満面の笑みだ（ストレイキヤツツの正式なパティシエは乙女だけである）。

これを見れば分かると思うが、乙女の神経はS・L・B並の太さなのだ。

希は乙女の後について行き、乙女の背中から顔だけを覗かせて奥を見た。

瞬間、視界に入つた光景に目を見開いた。

いや、光景と言うより人物に驚いた。

綺麗な黒髪をポニー・テルにまとめ上げた、女顔の男の子。

誰が見ても女と見間違えるような美人だが、希はそこで驚いたのではない。

あの時と同じ髪型。

自分が探していた、大切な友達。

考えるよりも先に体が動いていた。

走りながら、想いを言葉に変える。

「みづきつー！」

彼は希を見ると、懐かしそうに手を細めた。
嬉しい。

相手も覚えてくれていた。

もう我慢できない。

そのままの勢いで希は瑞希に抱きついた。

「久しぶり、のぞみちゃん」「フッ！」

彼 有馬瑞希との十年ぶりの会話は、お互ひの名前を呼び合った。

ンゴフツ？

希が顔を上げると、瑞希が後頭部を壁にぶつけ、白目をむいて気絶していた。

「…………めん／＼／＼

二人の幼馴染の再開は、女の子のタックルと男の子の氣絶という本人たちも吃驚なものだった・・・。

第4・5話 だから前回ポーテールにした（後書き）

なかなか一巻の内容が終わらない（笑）
次回は三週間以内に投稿できるように頑張ります。
感想待っています。

第5話 「若手」なんて甘いものじゃない（前書き）

「」まさかのオリ展開。
書いた作者本人もびっくりです。

第5話 「若手」なんて甘いものじゃない

朝？

腹に重みがあり、田を開けると、プリーにジーパンを穿いた女が馬乗りしていた。

「おはようお兄ちゃんつ！」

「…………舞華？」

かがり
篝 舞華。

少し長めのサイドテールに茶の混じつた黒い髪。そして一つ下の十六とは思えない程のスタイル。

俺（転生前）の妹であり、転生した田、高校の補習に行く時に姿を見たのが最後だった“はず”。

どうしてここにいるんだ？

第一、ここはどこだ？

「舞華、突然で悪いけど、少し一人にしてくれないか？」

「うん。別にいいけど……大丈夫？どこか具合でも悪いの？」

「何でもないよ。ちょっと考え方」

「そう？ならいいんだけど……」

舞華は部屋を出る前にもう一度俺振り返り「下で待ってるから、何

かあつたらすぐに呼んでね？」と言った。

久しぶりだからか、妹の優しい言葉が心に沁みわたる。

* * * * *

とりあえず一度情報を整理しよう。

俺はの「『すぐに呼んでね？』

「わかった。すぐに呼ぶから」

「本当だよ？」

「ああ。ありがとうな、舞華」

「うん／＼／＼

俺は舞華の頭を撫でた。

優しいうて言うか、若干プログラムなんだよなあ。

* * * * *

大きく深呼吸。

すう、はー、すう、はー。すう、波あ！
よし、情報整理開始だ。

俺は十六年前に車に撥ねられて死んだ。

と思つたら迷い猫オーバーランの世界に転生していた。しかも記憶付きで。

高校入学直前に親が「本当の本当にすぐだからねー！」

「わかったよ・・・・・」

桐とウチの妹を足して二で翻つたらいい感じの妹ができる気がする。

まあ、それはともかく。

やつぱり情報整理しなくていいや。薄々びづこいつ事になつたか分かつてるし。

決して面倒になつた訳ではないつ（キリッ）。
さて、この部屋を調べるか。

「つて言つてもなあ・・・」

内装といい、妹といい、十六年前と何も変わっていない。明らかにここは俺が元いた世界だ。

近くにあつた携帯電話を開いてみると、今田は七月一十四日。俺の記憶が正しければ、転生した日が一十三日。

つまり次の日である。

立ち上がって、机にあつた鏡を見た。

黒髪短髪に、いたつて普通な顔立ち。

名を簫 雄太。

予測はしていたが、やつぱり有馬瑞希の顔ではなかつた。

全てが元に戻つた？ 気絶しただけで？

体に違和感が纏わりついているような感覚が、とても気持ち悪かつた。

* * * * *

一通り部屋を調べたところで舞華が様子を見に來たので、そのまま部屋を出てリビングに來た。
そして只今朝食中。

「ねえお兄ちゃん」
「ん？」
「このあと暇？」
「うーん・・・」

暇と言えば暇なのだが、もつとの世界を調べないとけない。

「要件にものるけど、何かあるのか？」

「えつとね、その・・・私と、で、デートしてくれないかなー、な

んて・・・

「『テートへまあ別にいいけど』

転生前は何度もしてたし（妹限定）、町調べもできるから一石二鳥。

「ホントー…やつたま…じゃあ食べ終わつたらね…」

「ほんあーはやくあお（みんなにはしゃぐなよ）」

「だつて、お兄ちゃんとドテートなんて久しぶりだつたからーーー」

普通は彼氏にするだろうよ、そんな態度。

とこりか今の言葉が何故わかつた。

恐るべしブラコン。

三十分後。

二人で家を出て、舞華に行き先を聞いたら、

「ゲーセンー！」

つて元気に応えてくれたよ。さすが我が妹。
そのまま近くのゲーセンに行こうとしたら、舞華が腕にしがみついてきた。

「ダメ?」

「いや、構わないんだけど、何故に押しつける

「んー、何となく?」

何を押しつけられたかは『想像にお任せしよう』
ヒント・大きくてすごい柔らかかった

* * * * *

夕方。

ゲーセンで舞華に格ゲー（F a t）でフルボッコにされた後、昼食をとつてから別の所のゲーセンで格ゲー（ガンム）再戦。勿論フルボッコにした（妹が）。

結局俺が勝てたのは財布の軽さのみ。

父さん、母さん。俺、もう逝つてもいいかな・・・。

「勝手に逝つちや駄目だよお兄ちゃん。少なくともケーキ2ホール買つてくれるまで」

「お前、ホント悪魔だよな」

「お兄ちゃん限定の悪魔だよ？」

そんな悪魔いらぬー。てかハート消せハート。

格ゲー再戦時、勝つ気満々だった俺は「俺に勝てたら五万以内で何でも買つてやる」などと口走っていた。

それを聞いた舞華は呆れ半分、憐れみ半分に「ああ、うん。ありがとう・・・」と返事した。

今となつてはどれだけ無謀な事だったかが良く分かる。

ティナとバルが白い魔王に突撃するくらいに。

「ねえお兄ちゃん」

「どうした舞華？」

ホール追加か？

それだけはやめてくれ。男が一人でケーキを何ホールも買つ姿はこう、絵面的にキツイ。

「ずっと、一緒に居てくれるよね？」

それは不安そうな声だつた。

デートと並行して町調べもしてみたが、特に変わった所も無く、懐かしい風景のままだつた。

元に戻れるかもしれない。

舞華や友人たちと毎日を楽しく暮らす、あの日々に。

「ああ。これからもずっと・・・」

その先を言葉にしようとして、止まった。

家へと続く大通りを抜けようとした時、見たことのある店が目に止まつたからだ。

ストレイキヤツツ。

それを目にした瞬間、頭の中にいろんな人の顔が現れては消えていった。

巧。

芹沢。

梅ノ森。

乙女さん。

大吾郎。

家・・・ナントカ（顔にモザイク）。

鳴子。

一心さん。

中学時代のみんな。

父さん。

母さん。

のぞみちゃん。

そして優さん。

「舞華、ゴメン。一緒に居られない」

「え・・・?」

「帰らなきやいけないんだ

そう、みんながいるあの世界へ。
そのままストレイキヤツツに歩いて行こうとしたら、思い切り手を
舞華に掴まれた。

「行かないで……」

「舞華……」

「もう、私の前から居なくなつたんで……」

「“もう”？・・・まさか、舞華が

「この世界に俺を呼んだのか？」

口に出さなくても分かったのか、舞華が説明してくれた。

「うん。知らないおじさんに頼んでね。お兄ちゃんが並行世界あいつちで気を失つてる間に、私の意識を割り込ませてもらつたんだ」「なるほど……ってはあ！？」

何か今スゴイ事をさらつと言われた気がするんだけど…

知らないおじさん！？

意識の割り込み！？

「しかもね、私のパンツを見せただけでここまで手伝ってくれたんだよ」

「ちよ、ちよつと待つて。一旦待つて。ホント待つて！」

落ち着け、こよくななるんだ俺。

「・・・じゃあ何か？俺に会つ為だけに座りたMAXなおじさんこパンツ見せてここまで來たと？」

「うん。だつて、お兄ちゃんの事がすごい心配だつたから・・・」

Q 「兄と接触する為に自分の下着を赤の他人に晒す妹（16）ってどう思います皆さん。」

A 「ド変態乙。

A 「ブランワロタwww。

「それより舞華よ。そのおじさん何者？」

「んとね、おじさんは自分の事を『魔法使い』って言つてたよ」

「舞華、今後一切ソイツに近づくな」

「?うん。わかった」

それ、違つ意味の魔法使いだから。

「さて、ど。そろそろ行くか

「も、もう行っちゃうの?」

「そんなんに長居してたら、帰りたくないくなるからな

この世界はぬるま湯みたいなもの。

適温で気持ちいいけど、長く浸かっていると他の湯に入りたくないなつてしまつ。

「お兄ちゃん」

「どうした舞華」

「最後に・・・・キス、して」

俺は舞華の前髪を押さえ、おでこにキスをした。

篝家伝統の“約束の証”。

「元気でな、舞華」

「うん、お兄ちゃんも・・・／＼／＼

俺はストレイキヤツツのドアノブを掴み、ゆっくりと後ろに引いた。そしてドアの中から光が溢れ出し、俺を包み込んだ。

* * * * *

Said 舞華

光が消えると、お兄ちゃん」とお店が消えていた。

「あ～あ。行っちゃった」

本当は傷つけてでもお兄ちゃんを返さないつもりだった。だって、大切で、大好きで、狂っちゃうくらい愛してる人だから。でも、久しぶりのキスを貰つたら、頭の中が真っ白になつて、そのままお兄ちゃんを返しちゃつた。だからって、諦めたわけじゃないけど。

「待つてね、お兄ちゃん・・・」

主人公が消えたせいで崩壊していく世界の中で、私は小さく呟いた。

第5話 「若手」なんて甘いものじゃない（後書き）

舞華は初投稿時から出でないと考えていたオリキャラで、無事に出させて一安心です。

少し無理やりな気もあるけど、「都合主義って事で勘弁してください。

さて、次に舞華が出るのはいつになるやしない。

実は作者も考えていなかつたり（笑）。

感想待つてます。

第6話 キミノキモチノオレノオモイ（前書き）

一ヶ月以上遅れてしまつてすいません。

今回で一巻の内容が終わり、第一章が終了します。
なのでコメディ抜きのオールシリアルで進みます。

最初は「メティでいこうか」と思い、途中まで書いていたのですが、
最後くらいはきちんと絞めたいと思い、今回はシリアルで突き通します。

不快な方やいつものノリが好きな方は読まなくともOKです。

あ、最後にアンケートがあるので、そこには参加していただきたい
です。

第6話 キミノキモチノオレノオモイ

最初に見えたのは、白い壁。

次に感じたのは、右手を包んでいる温かさ。

起き上がろうと体を動かしたら、右手を握っていた人が目を覚ました。

「んっ」

「優さん。おはよ」

「……………瑞希さん?」

まるであり得ないものを見たかの様な声。
俺はそんな優さんの声を初めて聞いた。

「うつ・・・・・」

「優さん?」

「うう・・・みずき、さんが、もう、田を、覚まさない、かと、思
つて、いた、から・・・・・」

「そつか・・・・・」

皮肉なモンだ。

こんな時にならないと、彼女の心が分からぬのだから。

「俺、何日ぐらい気を失っていたの?」

「えっと・・・一|日半、くらい、です」

落ち着いた優さんから、俺が寝込んでいた間の事を聞いた。

予想通り、たつた一日半で色々な事があつたらしい。

俺が倒れた次の日に希の学園編入が決まり、更に次の日には乙女さんと一緒に登校した。

梅ノ森が乙女さんに丸め込まれたのだろう。

その日にはプール開きがあり、一悶着あつたという。
ま、そりやあるよな。持こ梅ノ森とか芋沢とか。

さらに同じ日の放課後に、梅ノ森がサークルを

卷之二

俺的には賛成だ。このサークルが後々重要になつてくるからな。
やうにやうに、乙女さんがまたいなくなつた。

今日は北欧の戦争を止めに行つたとか。

・・・・・あの人は何処へ行くのだろうか。

俺が学校を休んでいる間に見舞い客は来なかつた

それはともかく。

「なんで部屋が真っ暗なの？」

「何時間か前に台風で停電が起きたんです」

成程。台風があつたのか。

「あのさ、今何時?」

「時間ですか？只今午前4時25分ですけど・・・」

どのくらいか分からぬけれど、巧の起きる時間がだいたい5時半だから・・・。
少し危ないかも。

「優さん。今すぐ家を出たいんだけど、用意できる?」

「はい、大丈夫ですが……どうしてですか?」

「……………」

説明するにも時間が足りない。原作には“いつ”家を出たなんて書かれていなかつたからなあ。

どうしたものか……。

「分かりました。聞きません」

「え?」

そんな時、優さんが思い切つたよつに言つた。

「ただし、今は、ですけど」

「……どうして?自分で言つのも何だけど、起きてから三十分も経つていな病み上がりが、いきなり『家を出たい』なんて言い出したんだぞ?」

客観的に見て、俺の行動はおかしいだろ。

それでも優さんの表情には迷いが見えなかつた。

「瑞希さんの表情からして、あまり時間がないという事が分かりました。それに……」

「それに?」

「瑞希さんの行動に無意味なものは無いと、少なくとも私は信じていますから

そこまで俺の事を信じていいのか……。

「ありがとう、優さん。

なら、急いで準備してくれるかな？」

「はい。了解しました」

なら、全力を持つてその“信頼”に応えるとしよう。
この時ばかりは、俺を転生させた“何か”に感謝した。

S a i d 希

4時50分。

私はお世話になつた家ストレイキヤツツを出た。

無論、誰にも声はかけていない。

夜中、台風の影響から来る雷の怖さから、巧の手を必死に掘んで寝ていた文乃を見た時に分かつた。

『ああ、ここは私の居場所じゃないんだな』と。

あの優しい巧なら、私を気の済むまで家に居させてくれるだろう。
けど、わたしは恐れていた。

自分という存在が、彼らの日常を壊してしまつのが。
有り体に言えば、人に迷惑をかけるが怖かつたのだ。
いや、もつと簡単に“みんなに嫌われたくなかった”のかもしけない。

だから、ここを出た。

第一、目的はもう済んでいるのだ。

彼と出会つことができた。

たつたそれだけのこと。

それでも、私にとっては大事なことだった。

もう後に残すことはない。

さて、どこへ行こうか。

「『じ』へ行こうとしてるんだ？」

そんな時、私の心を見透かしたかのよつた声が聞こえてきた。
奇しくも、それは私が一番聞きたかつた声だった。

* * * * *

S a i d 優

「『じ』に行こうとしてるんだ？」

瑞希さんが家を出でから、初めて発した言葉でした。
その後、用意ができた瑞希さんは、一旦散に家から出ました。
台風の影響で、アスファルトが濡れていも関わらず。そこ
私も直ぐに追い付きましたが、瑞希さんはここに来るまでずっと無
言でした。

そんな瑞希さんに話しかけられた訳もなく、私達の間に沈黙が続き
ました。

どこへ走つてこのかと思つていたら、とある家の前で急に止まり
ました。

洋菓子店『ストレイキヤツ』。

そして店の前に、一人の女の子がどこかへ行こうとしていました。
彼女の名は霧谷希さん。

霧谷さんの話では、瑞希さんと幼馴染みだとか。

その彼女は今、なぜこんな朝方に家を出でているのでしょうか。
そして瑞希さんは、なぜここに来たのでしょうか。
まるで、霧谷さんを止めに来たかのよう。

気になる事は沢山あります。

ですがそれも後回し。

『すべて』が終わる。「ひー、瑞希さんが全部教えてくれると分かっていますから。

S a i d 瑞希

「…………いやあ。瑞希」

「まともに話すのはこれが初めてだな、希」

希は俺が名前を言った時に少し反応したが、それだけだった。

「もう一度聞く。希、どこへ行こうとしてるんだ？」

「…………いやあ。瑞希」「そ、どうしてここに？」

「質問を質問で返すのはルール違反……って、まあいいか。俺は

優さんと朝の散歩」

「…………今まで寝込んでいたのに？」

それは誰の所為だと問いただしたかったが、それじゃ話が進まない。

「そうだ。で、お前は？」

「…………いやあ、同じ。散歩」

「へえ、何も持たずに制服一つでか？第一、七月だからって、まだ
夏服だと寒いだろ」

「…………瑞希には関係ない」

関係無い、か。

さあ、ここがりざり説得していく。

「じゃあここで一つ質問。希はさ、ここに人を探しに来たんだろう？
探さなくていいのか？」

まあ、この町に来た方法は乙女さんに拉致られてだけだ。

「…………いやあ、もういい。見つかった」

「そうか。なら、一つ目。お前、施設の人に何か言つてから来たか？」

「…………知つてた？」

「全部な」

いづれ霧谷希“という原作キャラ”に出来つてから来てから、色々と調べていた。

原作知識と言えど、細部までは書いてない事もあるからな。

施設の事。

施設長 村雨四摩子

の事。

そして、彼女自身の事。

「その反応、何も言つてないな」

「………………………………」

「嫌気がさしたんだろ、施設に

「違う」

珍しく、希がはつきりと否定した。

「何が違うんだ？」

「…………これ以上人の迷惑になるのが、嫌」

「だから、施設を出たと」

「…………にやあ。そう」

「何があつた？話せる事があるなら聞くな？」

「………………………………」

そして希は、ぽつぽつと語り出した。

* * * * *

希から聞いた昔話は、俺が調べた事や知っていた事とほぼ同じだった。

第四村雨学園といつ孤児育成施設。

『村雨』の名字を得るという学園最高の榮誉。

そこに手が届くという嬉しくもない事実。

その裏で沢山の仲間が泣いているという事。

そこで気付いた“自分がみんなの欲しい物を奪い続けていた”という現実。

「…………だから、もうここにはいられない。また“何か”を奪い続けるから」

「…………」

この時俺は、悲しむでもなく、憐れむのでもなく、ただ純粋に嬉しかった。

十年ぶりに会話をした人間に、ここまで自分の心の奥底を語ってくれたのだから。

なら俺も、本気で希に教えなければならない。
彼女の勘違いと家族という大切な存在を。

「なら、聞いたのか？」

「…………？」

「巧に、乙女さんに、芹沢に、梅ノ森に、大吾郎に、家康に、鳴子に、優さん」に、『自分は迷惑をかけているか?』って。

俺は迷惑だなんて思っていない

「…………にやあ、聞けない」

「じゃあそれは、ただ嫌な事や辛い事から逃げてるだけだ」

人の事なんて言えない。

でも、言わなきゃいけない時がある。

その時が今だと、俺は思っている。

「第一、家族つてのは迷惑を掛けあいながら生きていくものだろ?」

「えつ、『家』。田のえびりがなじみ？」

い唯一無一の“絆”

「・・・・・私が、家族？」

「巧や乙女さんと一緒に過ごしてて、心が温かくなったり安心したりする事が無かつたか?」「

「………あつた。」やがて、あつた。

そうか。

“あ
ー
た
”
か

「なら、もう希は巧達と家族だ」

お安がさならかく聞にいりなしにまぐらに聞く事そこから始めてみるよ

「…」

「よし、分かつたならもう帰ろうか。寒いし、巧が心ぱ『瑞希！大
変なんだ！希が・・・つて、希！？』遅かつたか・・・」

只今の時刻、
5時18分。

さりや巧も起きる訳だ。

「巧、どうした？そんなに慌てて」

「いや、起きたら希がいなくて、それでみんなに連絡して、探すことになったんだけど」「バカ巧！そんなとこに突っ立つてないで、希を探しに・・・って、希！？」「被害者第一号が・・・」ははは・・・

これ以上いじりいると、被害者が続々と増えるだけだな。

「巧、俺達帰るな？詳しい事は希から聞いてくれよ

「あ、ああ、分かつたけ「巧一」これはどうこうい」と一希、このこと

「ガンバ。あ、それとお一人さん？」

「なにが!!」

「希から話があるから、真剣に聞いてくれ」

ニニヤニ

転生者から原作登場人物への、最後のエール。

「分かった。聞くよ、希の話」
「ふん。勝手に話せばいいじゃない」「そうか。じゃあ心配ないな。帰ろうう優ちゃん」「はい。それでは歸れる、また学校で」

そのまま家に帰らうとしたが、希が手を掴んできた。

卷之三

-
h?
L

「どういたしまして」

掴まれた手で希の頭を撫で、俺と優さんはその場を後にした。
さて、家に帰つて登校準備でもするかな。

* * * * *

「一田家の中にに入りうか」「話、早くしてよね。学校があるんだから」
「……にやあ、分かった」「まあ、それはともかくとしてさ、疑問があるんだけど」「……にやあ？」「なんで瑞希つて、いつも藤倉と一緒にいるんだ？」「幼馴染みとかじやないの？」「何か聞いてるか？希」「…………にやあ。何も」「ほんと、一人の関係つて不思議だよな」

* * * * *

「へくしょん！」「風邪ですか！？」

「いや、たぶん俺の事を誰かが考へてるんだろう」

希とか巧とか芹沢とか。

「ごめんな優さん。まだ言えないんだ、何も。俺がきちんと覚悟してから言いたいんだ、全て。それまで「はい。待ちます」「私は、瑞希さんのメイドですか」「…………敵わないな、優さんには」

これからも、優さんにはお世話になるんだろうな。

そんな事を考へると、申し訳ない気持ちでこっぽになつそうだつた。

でも、言つてくれたんだ。

「信じてこます」つて。

だから、こんな事を考へる時点で、優さんの信頼への感激なんだと思ひ。

あつきたりな考え方だけど、すくべ実感した。

強く、ならなきやつて。

「（施設、ですか・・・）」

「どうかした優さん？」

「え、なんでもありません」

「うつ?ならいいんだけど・・・」

せつ、たとえ些細なことでも、優さんから相談を受けるへりこは、強くなりたい。

第6話 キミノキモチ／オレノオモイ（後書き）

ようやく一巻が終わった（泣）

さて、ここでアンケートを取りたいと思います。

オリキャラ紹介を書いてほしいか、書かなくていいかのアンケートです。

前に活動報告で聞いたのですが、そのときに「書かない方がいい」という意見を書いてくださった方がいたのですが、その後、小説の感想に「オリキャラの性格がわからないので、紹介を書いてほしい」という意見も出たので、迷つてしまい、アンケートを取ることにしました。

『書いてほしい』という方は、瑞希と舞華と雄太のことも考えてくれると嬉しいです。

それと、今回のシリーズの書き方や雰囲気などの感想もお願いします。

感想や誤字脱字、アンケートなど待っています！

第7話 メイドには「フォルメで四次元ポケットがついている」（前書き）

本当に遅れていますんでした！！

かなり間を開けてしまつたので、前作と書き方が変わつてゐるかも
しません。

是非指摘してやつてください。

それでは、どうぞ！

第7話 メイドには「フォルメで四次元ポケットがついている

「なんだか長い間眠っていた気がするよ」

「そうですね。そんな気がします」

「アレだな、暴走して凍結されたんだろ」

「んな工 アみた的な事があつてたまるか

「・・・ふあ・・・」

「ああ、もう！希が起きちゃつたじやない。バカ巧！」

「いや、今のは都築にはあまり関係が無いと思うのだが・・・」

「第一、あたしの下僕に勝手に叱らないでくれる？」

「まあまあ、一旦落ち着一いつぜ」

「そうですね。鳴子様の言づ通りです」

「「「「「誰？」」」」」

「「「なんで」「？」」」」

* * * * *

「夢か・・・」

おはよついひこいます。いきなり夢オチでテンションダダ下がりの瑞希です。

希家出（未遂）事件から数日が経つた（もつと経つてこむよつた気もするけど・・・）。

その後、希が自分から巧達に自分の思いを話した。

勿論と言つべきか、巧達はそれを受け入れてくれた。

結果、希は前と同じように都築家に居候という形で収まつたのだが、重大な事（一部を除く）が残つていた。

「一学期末試験はひつあるの?」 b y 関小路瑞希

俺と優さんは既に高2までの内容まで全て終わり、今は高3の勉強をしているからおく。

家康は意外にも、かなり頭が良かつたりする。その分色々と残念だけど。

希は言わずもがな。確かに前の抜き打ち実力テストで、満点を取った3人の内1人らしい。後2人は察してくれ。

芹沢、梅ノ森、鳴子も頭がいい方である。

さて、ここで問題。

あと誰が残ってる?

* * * * *

七月某日（平日）

放課後。

そんな訳で、只今大吾郎と巧に調きよ・・・勉強を教えている。教えてている・・・はずなのだけれど。

「もうじやなくて、うう。もっと、この辺を重点的に・・・・・ね
?」

「ああんもう、違う違う、さつき教えた通りにやらなきや

「・・・・焦つちやだめ。リラックス」

なんだこれ。

巧の右肩から芹沢が覗き込んでいて、

巧の左膝に梅ノ森が座っていて、

巧の正面で希が椅子を前後逆にして座っている。

3:1で教えるのは別にいい。問題はそこじやない。

お前ら、巧に近すぎ。

そのせいで、巧の体のあちこちに女の柔らかさが押しつけられる。

あれは絶対に集中できないだろ？

え、他の奴らは？

家康は大吾郎専属のコーチ。

優さんは鳴子と勉強。

俺は積みラノ消費中。

「そもそも、この状況がおかしいのよつ！」

遅いんだバカ。

その話題は十行前に終わつたんだよ。

「船頭多くして船山に登るつ！教える人間が、2人も3人もいたら混乱するじゃない！」

そこは問題が無いんだよ。問題なのはメンバーだ。

もつと問題なのは、それを芹沢に向けて言う事。

また面倒臭く「そう思うんなら、そっちが身を引けばいいじゃん。

巧の面倒はあたしが見るからつ！」

あーあーあーあー。

「さあ始まりました巧くん争奪戦！司会は私、^{わたくし}鳴子叶絵がお送りします！実況はこの人。学園初の親衛隊を持ち、その美貌で男女問わず虜にする。【お姉さまとお呼び！】富小路イ、瑞きゅつ！」

「ポニテぶち抜こうか？」

来ると思つてたよ司会。^{なるい}

第一、それはレスターの紹介だ。

「うつづく 痛いぜよ～」

「ボーネー引つ張りの刑だけで済んだ事を光栄に思つんだな」

「優～！あのロン毛がいち、めてきた～」

「はいはい。大丈夫ですよ叶絵さん」

あ、優さんそつち側なんだ…。

つて、二人ともいつの間にそんな仲良くな?

「（瑞希ー）」

ん?

「（瑞希ー）」

念話?

「（・・・・の女装癖）」

「（いい度胸だ。お前の店燃やしてやるつか～）」

気が付けば、巧から視線で救難信号が送られてきた。

「（頼むーー）の二人の間から出してくれーー）」

「（ヤ）」

「（H E L P - ）」

「（S O R R Y ）」

「（お願ひー）」

「（だが断る）」

誰もあのシンデレラタカビ の間に飛び込もうなんて思つ勇者はない。

勇者30でさえ魁を投げるほど^{メラゾーマ}の火花があちらりひらり。
飛び火を食らうのは目に見えている。

「（それより巧君。俺より左右の耳を気にした方がいいのでは？）」
「（え？）いだだだだだッ！！な、なんだよつ！？」

巧がゆづくりと後ろを振り向くと・・・
そこに、般若の顔二つ。
美哉さんも顔負けレベルの。

「いい度胸ね？人が親切で勉強見てあげようって時間とった上に、
アンタのことで揉めてるのに、瑞希に見蕩れて鼻の下伸ばして
んて。いい度胸としか言い様がないわ」

待て、理由がおかしい。

「誰の為に、このつまご生意氣女と言ひ争つてると思つてんの。
いくつあたし直属の下僕でも、そーゆー態度は肅清の対象ね」

そーゆー態度？

とこりか直属の下僕とか（笑）

「第一、なんで瑞希なのよ・・・せめて藤倉や希だつたら許せたの
に・・・（ポソッ）」
「そこに関しては同意よ・・・くつ、これだから男の娘は（ポソッ）」

「ハリセン」
「はい、どうぞ」

何故優さんがハリセンを持つているかはスルーをせてもらおう。

今は・・・「イツ等だ。

「ま、待ちなれどよーべ、別に本氣で言つてゐ訳ないぢやない・・・

「そ、そーゆーちょつとしたジョークぢやない。あ、あはは・・・」

「ならこいつ向けや」

決まったな。

判決は【禁則事項です】

「ちょ・・・・・」

「待つ・・・・!」

パパアンツ!

* * * * *

数日後。

テスト期間が終わり、クラス中がたれぱんだみみたいになつてゐる頃、妙につざつたい奴が現れた。

「おひおひおひ、イチャこらイチャこら見せつけてくれるぢやねーかよお」

モヒカンに、肩に棘のついた革ジャンを素肌の上から着てゐる家康姓もじと、家康姓もじと同じ格好をしてゐる大吾郎だつた。正直、見てて辛い。目も心も。

「ねー優さん、あいつらを秘剣燕返しでアリハーテー

「分かりました。では・・・・・秘剣！（シャキン）つひ「待て」

何故出来るんだ。

そしてその物騒な小太刀を一旦床に置いといつか。

「あのね優さん。メイドだからって、何でもしていいって訳じゃな
「ヒヤーハッ！新参者にはオレ様が特別にここのルールを教えて
やるぜ！」」

イラツ //

「ねえ巧、殴つていい？」

「まあ落ち着け」

「俺が許可する」

「おい瑞希」

「ジヨウダンダヨタクミクン」

「ならその手を離してやれよ・・・・」

只今俺の右手は革ジャン世纪末戦国大名の胸倉を掴んでおりま
す

「お前に二つの未来をやろう。
要件を手短に話して死ぬか、
お前を長々と翻つて殺すか、
さあ選びな！」

「瑞希さん色々と崩壊します」

「わざいよ優さん。

こっちもテスト明けでダルいのに、さうにコマイツ等が来るなんて。
そりゃキャラ崩壊もするさ。

『瑞希のキャラ?ハハツ、そんなものフ話にして定まつてなブヒョ
ツ』

(ム。) (G=) (> ^ 瑞) 黙るつか。

「う、梅ノ森がお前達を屋上に呼んで来い、と・・・」

「そりか、御苦労。ほい、芹沢」

無造作に投げ捨てる、と見せかけて、ちょうど良く決まる位置に革ジャン世纪末(トコ)をバスする。

期待してゐぜ?

「任せなさい!」

そんな俺の心の声を聞いたかのよつこ、芹沢は革ジャ(トコ)の鳩尾に自分のつま先を^レこした。

「一回死ねつ!・・・

「べ�れゅつ!」

か(トコ)は一部で有名な感染病の名を叫びながら、掃除用具ロツカーに叩きこまれた。

芹沢が全略をシユウウウウウウウウウウウト!

「あー、スッキリした」

彼女の顔を見た巧は後にこいつ言つたといつ。

『あれほどの笑顔はそつそつ見れない』

第7話 メイドにはフォルメで四次元ポケットがついている（後書き）

なんども言います。自分は家康が好きです（笑）。

というか場面が全然動いていないですね・・。

鳴子の口調やセリフが一部おかしかったので編集しました。
次回はいつになるかわかりません（前からでした）。

一ヶ月以内には投稿したいです。

あ、ツイッタ 始めました。よければ見てください。

<http://twitter.com/#!/sirubarion>

次は屋上から。

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8811m/>

残念すぎる最後を迎えた男の物語

2011年8月13日15時38分発行